

第6章

400年ぶりの仏教改革、供養は不要とお釈迦様は教えられた

【第6章の狙い】 お釈迦様は、供養は不要と教えられ、死者が供養によって救われることはないのです。あの世のルールは因果応報・自己責任であり、自分の生前の行為によりあの世の居場所が決まるのです。

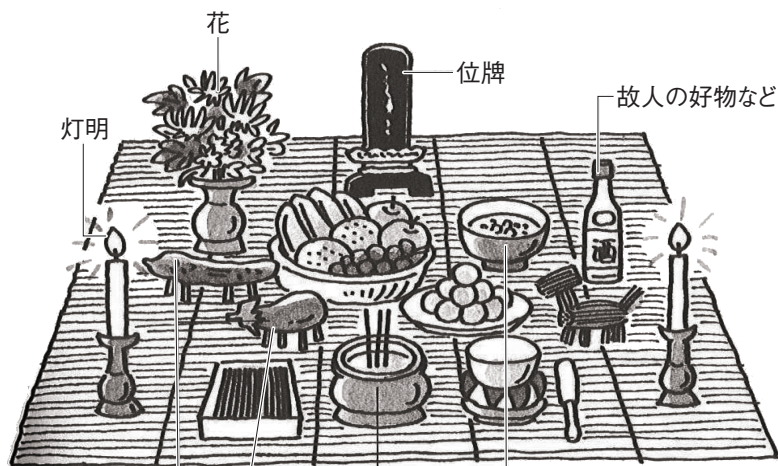
ところが江戸幕府は、1612年キリシタン禁止令を公布し、「宗門改め」を行って、住民はすべていずれかの寺院に仏教徒として登録することを強制され檀家制度が確立しました。寺院は葬儀や法要を行い供養を中心に活動し、お布施を収益源として今日に至っています。

この檀家制度は400年の時を経て、供養の慣習が崩壊し始めています。第6章はその理論背景から、供養の誤りを鋭く指摘しています。

- ①人間の「死」の正しい解釈は、苦しかった人生を卒業し、「命の神様」のところに還ることですから、人間の誕生以上に「オメデタイ」ことなのです。喜ぶべきことです（58）。
- ②コロナ禍により、いきなり家族葬が増加し、さらに、葬式をしない「直葬」が約4分の1にも達しています。
- ③戒名・法名は不要です。なぜなら、輪廻により、生死を繰り返していますから、死ぬ度につけると、一つの生命に、何百何千もの戒名・法名がつくことになり馬鹿げています。
- ④位牌に宿る霊は、浮遊霊であり、厳に排除されるべきものです。また仏壇に一介の死者の位牌を祀ることも厳禁です。ご本尊と同列に祀ることは無礼極まりないことで、直ちに撤去すべきです。

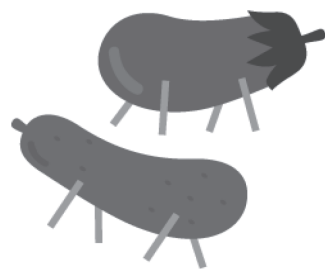
54 お盆は仏教行事ではない

○ 精霊棚の飾り方 ○



キュウリの馬、ナスの牛
 キュウリとナスに芋殻（おがら）を刺して馬と牛をつくる。先祖の霊が馬に乗って早く帰ってきて、牛に乗ってゆっくりあの世に戻っていくようにとの願いを込めたもの。

水の子
 ナスをさいの目に刻み、洗い米を混ぜて、清水を満たした器に入れて備える。祀る人のない無縁仏や餓鬼への供え物と考えられている。



- ★ 仏教が日本に伝わる以前から「魂祭り」という習俗があった
- ★ 魂祭りはお盆と正月に「先祖が子孫に会いに来る」のを迎えた
- ★ お盆に「亡くなった人が子孫に会いに来る」教えは仏教にない

お盆の行事の起源

仏教が日本に伝わるよりも前から「魂祭り」という習俗が行われていたようです。これがお盆の行事の起源と考えられます。

魂祭りは盆と正月に行われ正月の魂祭りでは「歳棚」、盆の時は「精霊棚」という臨時の神棚を作って「亡くなった先祖が子孫に会いに来る」のを迎えるものです。先祖の魂は年に2回やって来ました。

ご先祖様は山の上において、山から家に帰ってくるという民間信仰が仏教以前からあり、それが続いています。

精霊棚とは

昔は盆の時には、「魂棚」とか、「精霊棚」という臨時の神棚を作って、ナスやキュウリに4本の棒を刺して飾っていました（左の図を参照）。キュウリは馬を、ナスは牛を表しています。「お盆が始まったら馬で先祖を迎えに行き、お盆が終わったら牛で先祖を送る」ということです。

馬は脚が速いから、すぐに先祖を家まで連れて来て、牛は脚が遅いからゆっくりゆっくり先祖送って行きます。なるべく長い時間、先祖と一緒にいられるようにするためです。

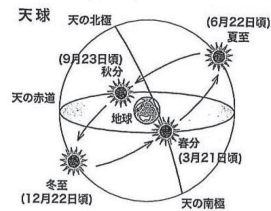
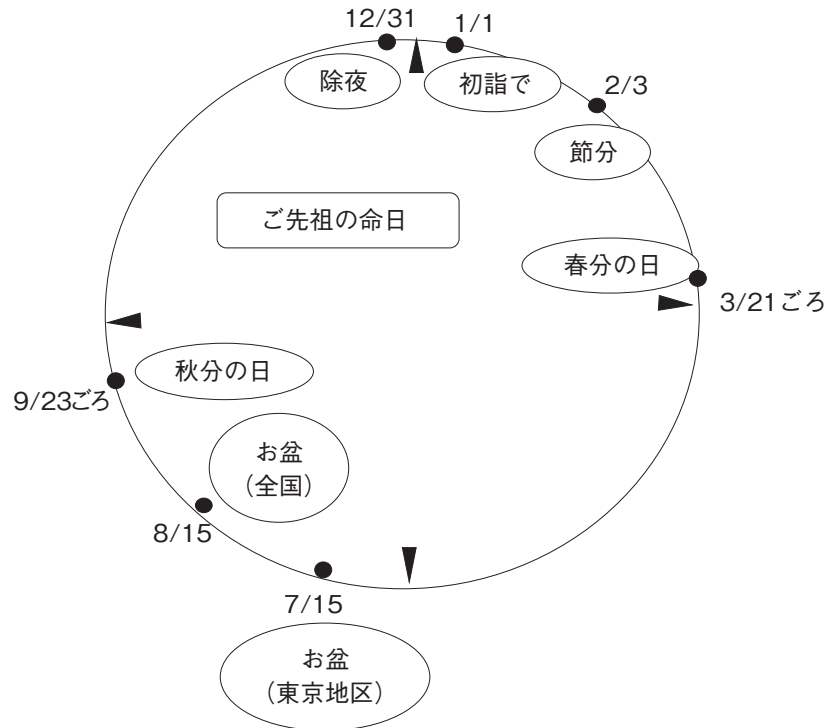
盆は仏教の行事ではない

「盂蘭盆会」という仏教行事があります。インド仏教にはなくて、中国仏教で始まったものです。日本でも7世紀ごろから行われています。ところが仏教の教えでは、死んだ人は、輪廻するか、浄土に往生するかのいずれかです。輪廻すれば、再び生まれ変わって別の家の人となっていますし、浄土に行っている人は往生しており、この世に出てくることはありません。

よってお盆に「亡くなった人が子孫に会いに来る」という教えは仏教にはありません。

55 お墓参りの風習が消えるのか？

● お墓参りは1年に5回？ ●



彼岸会

春分、秋分を中日とした7日間に行われる法会。飛鳥時代頃から始まった行事で、平安時代初期から朝廷で行われるようになり、江戸時代に一般化した。彼岸中日に墓参り、先祖参りをする人が多い。

- ★江戸初期より死者はお墓に住み続けることになった
- ★遺族が死者の供養をし、墓参りをする風習ができあがった
- ★死者はあの世に行きお墓には宿らないので、お墓参りが不要に

死者は浄土でなく墓にとどまる

中世（平安・鎌倉・室町時代）、人は、この世を遠い浄土に到着するまでの仮の宿としていました。

14世紀から次第に人々の関心があつた世からこの世のことに移行し、近世（江戸・明治・大正時代）、人は、来世での救済よりも、「この世で幸福な実感」と「生活の充実を重んじる」ようになりました。

このような世界観の変容は、死者の行くべき所が遠い浄土ではなく、人は死んだ後も、この世にとどまり続けることになりました。

それで、遺骨と墓標があるお墓に住み続けることになったのです。

仏様に代わって、死者供養の主役を務めるのは、遺族です。

墓参りの風習ができあがる

折りしも、16世紀は世代を超えて継続する「家（いえ）」の観念が、庶民層にまで下降していく時代でした。自分たちが今いるのは先祖のおかげであり、代々の先祖をきちんと供養しなければならないと認識され始めました。家ごとの墓地が定着し始めるのもこの時代でした。

お寺の境内墓地が急激に増加し、近親者は折々墓地を訪れ、死者を供養するため、墓参りをする風習ができ上がりました。

また一年に一度、お盆の時期には死者を自宅に呼んで、手厚くもてなすようになりました。死者と生者との定期的な交流（新年、春秋彼岸、お盆など）が、国民的な儀礼として定着しました。

お墓参りの風習が消える？

平成時代に入り、死者がお墓にとどまるのは浮遊霊ですから、あの世に行くべきもので、お墓には宿らないと確信し始めました。

徐々にお墓の不要論も出てきて、墓じまいが急激に増加しています。

お墓は半減し、残ったお墓にもお墓参りの足が遠のいてきます。

やがて、お墓参りの風習が消えていくのでしょうか。

56 お釈迦様の教え・供養は不要

● お釈迦様のお言葉 ●

印度でも、釈迦の弟子が、「死人のまわりで有り難い経文を唱えると、善い所へ生まれ変わるというのは本当でしょうか」と尋ねている。黙って小石を拾い近くの池に投げられた釈迦は、沈んでいった石を指さし、「あの池のまわりを、石よ浮かびあがれ、浮かびあがれ、と唱えながら回れば、石が浮いてくると思うか」と反問されている。石は自身の重さで沈んでいったのである。そんなことで石が浮かぶはずがなからう。

人は自身の行為（業力）によって死後の報いが定まるのだから、他人がどんな経文を読もうとも死人の果報が変わるわけがない、と説かれている。

読経で死者が救われるという考えは、本来、仏教になかったのである。釈迦80年の生涯、教えを説かれたのは生きた人間であり、常に苦悩の心田を耕す教法だった。死者の為の葬式や仏事を執行されたことは一度もなかったといわれる。

死後の立場は
亡くなった人の現世の生き方の
結果であり、他人の供養は効果がない。
因果応報、自己責任の世界である。

出典：高森顕徹著 「歎異抄をひらく」 1万年堂出版

- ★人は「人生の行為」によって「死後の報い」が決まる
- ★他人がどんな経文を読もうと死者の果報は変わらない
- ★亡くなった人「本人」の「因果応報」「自己責任」の世界

高森顕徹先生のご紹介

51万部発行のベストセラー『歎異抄をひらく』の著者、高森顕徹先生は、昭和4年、富山県生まれ、龍谷大学卒業。日本各地や海外で講演、執筆をされています。

お釈迦様の教え

左の表のとおり、お釈迦様は、「歎異抄をひらく」の中に「供養は不要」と答えておられます。

「黙って小石を拾い近くの池に投げられたお釈迦様は沈んでいった石を指さし、『あの池のまわりを、石よ浮かびあがれ、浮かびあがれ、と唱えながら回れば石が浮いてくると思うか』と言われています。

石は自身の重さで沈んでいったのである。そんなことで石が浮かぶはずがない。人は自身の行為（重力）によって死後の報いが定まるのだから他人がどんな経文を読もうと死人の果報が変わるわけがない」と説かれています。

因果応報・自己責任の世界

左の下に表示しているとおり、死後のあの世での立場は、亡くなった人の現世の生き方の結果であり、「他人」の供養は亡くなった人に効果がありません。あの世の評価は、あくまで、亡くなった人「本人」の「因果応報」「自己責任」の世界です。あの世では、亡くなった人が現世でどのように生きてきたか、「人生回顧（人生の振り返り）」として徹底的に追求されます（37・69・99）。

この「人生回顧」は、何度も何度も繰り返し実際の行為が見せられ、言い訳のできない世界です。一人ひとりのデータが「人生記録」に備蓄されていて逃れることができません。

「人生回顧」があつた世での最大の任務ですから、生きているうちから準備が必要です（69・99）。

57 あの世は「因果応報・自己責任」

● 因果応報 ●

仏教で、善因には必ずよい結果があって、悪因には必ず悪い結果があつて、因と果は相応じて例外のないこと。

また過去の行いに応じて必ずその報いがあるということ。

因果＝因縁と果報。物事を成立させる因縁と、それによって生じた果報。

応報＝行為の善悪に対する報い。

● 自己責任 ●

自分の判断がもたらした結果に対して、自らが負う責任。

● 以上の結果 ●

生きて来たことの報いは必ずあつて、その責任は自分で負わなければならないのである。そのため、子孫が死者の供養をしても死者の自己責任だから死者にとって、何ら効果はない。

- ★前世以前に努力した結果は、この世に引き継がれて実る
- ★勉強をすれば成績が上がる、遊んでばかりいると下がる
- ★自分が犯した罪は自分が償うべきもので、供養では救われない

努力をしたら報われる

筆者は2022年の11月に80歳を迎えましたが、その前後に「狭心症」そして合併症で「心不全」になり、肺に水がたまり、11月から翌年1月までの3ヶ月間、入退院を繰り返しました。

今回の病気になる前の40年間水泳をやっていましたが、たった3ヶ月間、病気で休んだら、あっけなく、全く泳げなくなってしまいました。病気を因として泳げなくなるという結果が出たのです。

それから、リハビリと思い、2月から4月までトレーニングを続けましたら、やっと300mほど泳げるまでに回復しました。因果応報の実験のような出来事でした。

これと同様に、勉強すれば成績が上がります。子どもが遊んでばかりで勉強しなかった結果は、これぞ子どもの自己責任ですから、将来必ず結果として表れ、子どもが失敗をするのです。

そして子どもの成績が良くなりますようにと、祈願しても、成績が良くなるはずはありません。

前世の努力はこの世で実る

人間は何度も輪廻して生まれてきます。前世で努力した結果は、この世に引き継がれて、この世で開花し実ります。子どものときから、天才的ピアニストなどは、前世の努力がこの世で花開いているのです。

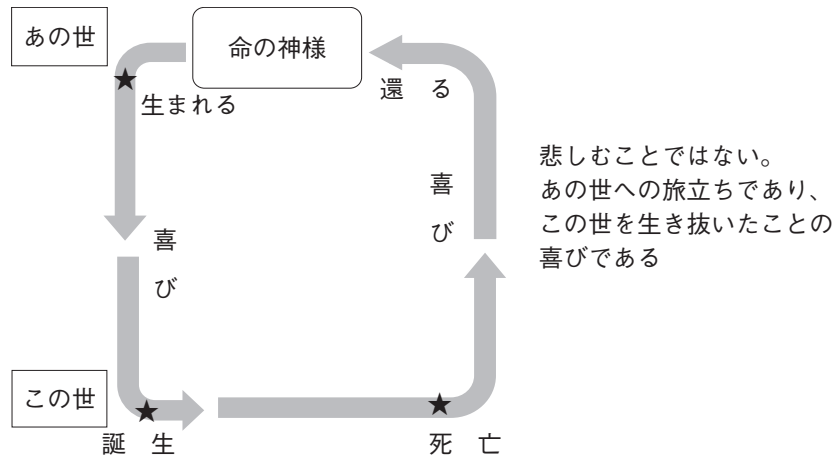
供養の効果はない

因果応報の責任は、行為者本人が負うものであり、その報いは行為者本人が償うことになります。

たとえば、父親が殺人をして、父親が死んだ後に、子孫がその父親の罪を軽くするために父親の供養をしても、父親の罪を軽くすることはできません。父親は、自ら自分の罪を償わねばなりません。このように死者の供養をしても、死者にとってプラスの効果はありません。

58 死は人生の卒業だからオメデタイ

○ 死ぬことの意味 ○



人間の死はこの世の任務をなしとげて、生まれて来た「命の神様」に還ることである。人間のこの世への誕生と同じく、人間の死はあの世へ還る「おめでたい」ことである。

死んだとき、身内の人が死者にすぎり、泣き叫ぶと死者はこの世に未練を残し、浄土への旅立ちができなくなる。

死者が成仏できるように温かく送ってあげるべきである。

- ★人間の誕生の声は全世界に響いており、実に「メデタイ」こと
- ★死を死者から見るとこの世を卒業し神に還る「メデタイ」こと
- ★人間の死も「喜び」であり、遺族は温かく見送るのが正解

筆者の長男の誕生

私が25歳、妻が22歳のとき、昭和42年5月8日に長男が誕生しました。このとき、ひどい難産でして、産婦人科医が2人がかりでお産に立ち会っていただきましたが、「親が死ぬか」「子どもが死ぬか」のどちらかと言われました。そのころ私は、滝の修行をしており、午後10時ごろに滝場に入り、勤行を始めました。その滝場の指導者は、外科医の小川新先生でしたが、日蓮正宗で、うちわ太鼓をバチで叩きながら「南無妙法蓮華経」の、お題目を必死で唱えました。

すると、耳をつんざくような「オギャア！」という赤ん坊の音がして、驚きのあまりバチを強打してバチが折れてしまいました。時に午後11時30分、長男の誕生と確信しました。それは10kmも離れた真っ暗な山中でしたから「人間の誕生の声は全世界に響いているのだ」と感じました。長男は首にへその緒が3重に巻き付いて、鉗子で頭を掴んで引っ張り出したようです。

人間の死は喜び

伝統的に、人間の死を悲しむ風習があって、死から葬儀～火葬場まで、遺族は泣きぬれて、参列します。

もちろん、死別の悲しみはあるのですが、死者の立場から考えますと、長年の人生を苦勞して生きてきて、修行の場のこの世を卒業し、生まれてきたあの世の神仏の基に還る「メデタイ」ことなのです。

それは人間の誕生より以上に「メデタイ」ことなのです。大いなる喜びです。このように風習を変える必要があります。

死者は暖かく見送ること

左の図表の一番下に書いていますが、泣き叫ぶと、死者はこの世に未練を残し、浄土への旅立ちができなくなります。遺族の方は、「よくがんばったネ」と温かく見送ってあげてください。

59 あの世での生命の居場所が時代で変化

● 葬送儀礼、死者の居場所と供養 ●

時代	死生観	死者の居場所	救済者・供養者
中世以前	<ul style="list-style-type: none"> ○広範囲に板碑が建立された。 ○集団墓地がある。 ○匿名化して板碑に故人名は記されていない。 ○供養は不要 	他界浄土	仏・菩薩が救済する。
江戸明治大正戦前	<ul style="list-style-type: none"> ○寺院内の境内墓地が普及 ○墓碑に銘記される故人名 ○死者供養の主役が、仏様から遺族にとって変わる。 ○年忌法要以外の交流（新年、春秋彼岸、お盆など）を通じて、死者がご先祖様になる。 	お墓（江戸中期以降現在の型） 境内墓地	供養の主役は子・孫の役目とされた。
戦後	<ul style="list-style-type: none"> ○「家」や「共同体」が解体し、「忘却される死者」「供養されない死者」が増加している。 ○人口減少、少子化により、お墓の承継者が不在となり、無縁墓が急増する。 ○同時に「墓じまい」が増加していく。 	死者の居場所 がなくなる。 無縁墓、墓じまい	供養されない死者

出典：佐藤弘夫著「人は死んだらどこに行けばいいのか」興山舎

- ★中世以前は、死後は「他界浄土」が住まいで仏様が救う
- ★江戸初期から、死者は墓に宿り、供養は遺族が務める
- ★戦後は、大家族が崩壊し、墓を守り、供養が続けられなくなる

佐藤弘夫先生の『人は死んだらどこへ行けばいいのか』（興山舎）は、現地調査を含め膨大な資料を基にまとめられた圧巻の著書です。

左の表は「葬送儀礼、死者の居場所と供養」を筆者がまとめました。

中世以前

中世以前は、死後は「他界浄土」が居場所で、仏様や菩薩が死者を救済すると考えられ、お墓は匿名で、板碑が建立されていました。

江戸時代～終戦まで

江戸時代に入ると、来世での救済よりも、この世での幸福の実感と生活の充実を重んじるようになりました。

死者は「他界浄土」には行かず、この世にとどまり、遺骨の眠る墓を離れることなく、棲み続けると考えるようになり、そして、仏様に代わって、死者供養の主役は遺族が務めるようになりました。

お墓がお寺の境内に作られる境内墓地が増え、江戸初期には、現在の和墓のデザインが確立しました。今から約400年前のことです。

終戦～現代

終戦後は、家制度が変容してきました。人口の都市流入に伴って、大家族は解体し、夫婦とその子どもからなる小家族が世帯の単位となっていきます。生活の形態が多様化して未婚を通す男女が増え、亡くなった後に弔ってくれる親族を持たない人が大量に出現しました。

世代を超えて家の墓を守り、祖先を供養し続ける風習を、多くの家族が維持できない時代となってきました。無縁墓が増え、忘れ去られる死者、供養されない死者が、日々大量に生まれています。

このように、江戸時代初期から約400年の時を経て、令和の時代になりました。「家」の制度が崩壊し、親と子どもの住んでいる場所が異なっているため、子どもが田舎の「お墓の守り」ができなくなっています。墓じまいが増え、お墓がなくなる時代が始まっています。

60 寺院は供養から生き方の指導に転換

○ 「死者の供養」から「人間の生き方」に ○

テーマ	内容
寺院のあり方	538年に仏教が日本に伝来し、あれから1,500年の時が経過した。現在の寺院は、葬式・法要に終始し、しかも經典の現代語訳もなく、読経を聞いても、「生きている人」も「死者」もチンプンカンプン、何も分からない有様である。「死者の供養」から離れ、「生きた人間」をターゲットに、正しい生き方についての「相談・教育・指導」を本業に転換すべきである。
お墓と仏壇の関係	寺院では塔に舍利（仏骨）を取って墓を意味し、本堂には仏像を安置して救済を求めてお祈りする形態となっている。 一般庶民も同様に「納骨をするお墓」と仏像（名号や仏像の軸）を安置し「救済を求めてお祈りするのための仏壇」に区分すべきものである。
戒名、法号、法名は不要	インドでは戒名の風習はない。中国で仏典の定めた「戒」を受けた者だけ「法号」が授けられた。鎌倉時代に日本に伝えられ出家して沙弥になったときに「戒名」が与えられた。今日では、仏教徒の死者にはすべてつけられるようになった。 現在では、俗名で親しみを込めて会話しの方が良いので、戒名は不要である。
位牌も不要	仏壇の中にある位牌は、死者の戒名（法名）を書く、台のついた長方形の木牌である。位牌によって葬儀や供養が行われるが、仏教発生の地インドではこうした風習はない。 中国では、儒教により、死者に冠位をつけることが行われ、これが鎌倉時代に禅宗によって日本に伝播された。 仏壇に安置された仏像に対して救済を求めて祈るのが本来の姿であり、位牌は不要である。

出典：大洋出版編集部編「信仰の原点（仏教編）」大洋出版

- ★釈迦80年の生涯、死者のための葬式や仏事を執行されなかった
- ★釈迦生誕後、約2500年の時を経て死後の世界を解明すべし
- ★死後の世界で幸せになるためにこの世の生き方を指導すべし

葬式仏教は止める

54項の高森先生は「釈迦80年の生涯、死者のための葬式や仏事を執行されたことは一度もなかった」「今日それが、仏教徒を自認している人でも、『葬式や法事・読経などの儀式が死人を幸せにすることだ』と当然視している。その迷信は金剛のごとしと言えよう。」と述べておられます。

左の図表の仏壇、戒名・法号・法名、位牌の欄はこれまで述べてきたまとめです。

死後の世界の解明

1項に「お釈迦様の教え・死後のことは考えるな」と言われたことを述べています。そして、その教えを、釈迦生誕後約2500年経った今も仏教界では守り続け、正しい「死後の世界」の解明を怠っています。

日本に仏教が伝来してからも、1500年の月日が経った現在では、多くの科学者が「死後の世界」があることを発見しています。

さらにスピリチュアリストの先生方が、死者との交流を深められ、死後の世界のしくみがどんどん明らかになっています。本書は筆者の能力に限界があり、それらの全貌をつかむことはできませんからほんの一部の情報から「死後の世界」を書いたものです。どうか仏教界におられる方全員で、本当の「死後の世界」を解明してください。

生きた人間を救う

死後の世界の本当のしくみが判明すれば、それに対する「この世」の「生き方」と「あの世」への「死に方」の指導ができます。

仏教が生きている人の「幸せ」を願うなら、この世の「生き方」もさることながら、死後に本当の幸せをつかむべく、仏様と一体となるように、「死に方」も丁寧に指導すべきです。それこそが、最も大切なことです。仏教界の皆様方の活躍をお願いします

61 葬儀をしない「直葬」が25%に増加

● 直葬（火葬式） ●

火葬だけを執り行い葬ることを、近年では、直葬（ちよくそう）火葬式（かそうしき）と言われるようになりました。



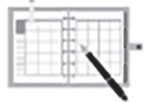
読経供養などの宗教儀式は行わず、親戚や知人の弔問を受けることなく、しめやかに家族だけ弔う、シンプルな葬式スタイルです。

直葬（火葬式）では、宗教儀式を執り行う式場や祭壇が必要ない為、費用を安く抑えることができます。

時代の変化により、お通夜や葬儀・告別式を不要とする考えの人が多くなりました。現在では葬儀全体の2割程度が直葬にて執り行われております。この割合は都市部ほど高く25%近くにもなり、4～5人に1人は火葬だけの直葬にて弔われております。

出所：平安祭典HP

● 直葬・火葬式はこのよう方々に選ばれている ●

 <p>できるだけ 費用を抑えて 葬儀を行いたい</p>	 <p>参列者が少ないので 簡素に葬儀を行いたい</p>	 <p>日程優先で お見送りしたい</p>
---	---	--

近年では高齢化が進み、故人様にご縁のある方たちが既に亡くなっていたり、あるいは健康上の問題などで参列が難しいケースは珍しくありません。また、葬儀に際して遺族の心身や金銭的な負担を軽くすることも、考慮する必要があります。

伝統や形式に縛られず、従来のお葬式にこだわらない人が増えたことも、直葬・火葬式が選ばれている理由の一つです。

出所：家族葬の広仏HPより

- ★直葬（火葬式）とは、宗教儀式は行わず、火葬を行い葬るもの
- ★直葬のメリットは、費用が安い、葬儀が簡素、日程優先が可能
- ★現在では、葬儀全体の20%が直葬で、都市部では25%にも及ぶ

直葬（火葬式）とは

直葬（火葬式）とは、火葬だけを執り行い葬ることをいいます。

読経供養などの宗教儀式は行わず、親せきや知人の弔問を受けることもなく、しめやかに家族だけで弔う、シンプルな葬送スタイルです。

にわかに「家族葬」がブームになりましたのは、3年に及ぶコロナ禍が最大の要因です。コロナの最初のころは伝染病のごとく扱われ、入院中の患者にも面会できず、もちろん「看取り」もできない状態で死者が隔離されていました。

そのため、以前のようにたくさんの参列者を呼ぶ葬儀ができなくなり、いきなり家族だけの「家族葬」になりました。

コロナでなくて死んだ場合も、密を防ぐ大号令の下、人が集まることが避けられて、「家族葬」をせざるを得なくなりました。

「家族葬」の場合でも葬儀は身内だけで行うケースもありますが、「直葬」の場合は、宗教儀式はないのが原則です。

左の図表の上ですが、時代の変化によりお通夜や葬儀・告別式を不要とする考えの人が多くなり、現在では葬儀全体の20%程度が直葬になっています。さらに都市部では25%にも及んでいます。

直葬のメリット

図表の下のほう直葬のメリットは、費用が抑えられる、参列者が少ないので簡素にすむ、家族だけの都合で見送れるなどが考えられます。

必要な費用

必要となる費用は、遺体の搬送費、安置の費用、棺の購入費、火葬費用などになります。ネットで検索しますとグレードによりさまざまですが、消費税込みで10万～20万円くらいの表示があります。

あらかじめネットで調べておいて、葬儀屋さんに発注すべきです。葬儀屋さんに頼まないと、棺や遺体の搬送が困ります。

62 輪廻中の死者には戒名・法名は不要

● インドでは戒名はない ●

インドでは戒名の風習はない。
出家した者に釈子、沙門をもって、姓とし、在家で帰依した者は俗名をそのまま、唱えた。

● 中国から日本に戒名が入る ●

中国では、仏典の定めた戒を受けた者だけ法号が授けられ、これを戒名といった。

日本には、鎌倉時代に伝えられ、出家して沙弥になったとき戒名が与えられた。
後には、在家のままでも、仏門に帰依し、受戒会を受けた者に授けられた。
さらに、生前仏門に帰依しなかった者も、死者戒名がつけられるようになった。
今日では、仏教徒の死者にはすべてつけられるようになっている。
浄土真宗のみが「法名」と呼び、他宗は「戒名」、「法号」と呼ばれる。

● 戒名は不要なものである ●

ご先祖様の数が増えると、俗名以外の戒名がつけられ、とても覚えられなくなる。本来不要な戒名であり、必要性がない。

- ★インド仏教では戒名の風習はないので、在家の者は俗名のまま
- ★中国仏教では戒を受けた者だけに法号が授けられ、これが戒名
- ★日本では仏教徒の死者には戒名がつけられるが、不要である

戒名とは

戒名とは、戒律のある宗派で「戒律を受けることによって与えられる仏弟子としての名前」のことです。本来は生前に授戒の儀式を行って授かるべきものです。

戒律のない浄土真宗では「法名」、日蓮宗では「法号」といいます。
戒名が決まったら、僧侶に白木の位牌に書き込んでもらい、祭壇に飾ることになります。

戒名の風習の伝来

左の図表のとおりです。インドでは、戒名の風習がありません。
出家した者に釈子、沙門をもって姓とし、在家で帰依した者は、俗名をそのまま唱えました。

中国では、仏典の定めた戒を受けた者だけ法号が授けられ、これを戒名といたしました。

日本には、鎌倉時代に伝えられ、出家して沙弥になったとき、戒名が与えられました。その後、在家のままでも、仏門に帰依し、授戒会を受けた者に授けられました。さらに生前仏門に帰依しなかった者も、死者戒名がつけられるようになりました。今日では仏教徒への死者にはすべてつけられるようになっています。

戒名は不要なもの

死者の全員に戒名がつけられるようになりましたが、その死者はやがて輪廻して、生まれ、また死ぬと、さらに戒名がつけられることになります。一つの生命に戒名がたくさんつけられることになります。

また旧家では先祖の方が、多くなりどなたの戒名かがわからなくなります。本来戒名は不要であり、つける必要はありません。これは単に僧侶の収益源になっているものですから、廃止すべきです。

俗名でお呼びすれば十分で、戒名にする意味がありません。

63 位牌は仏壇に祀るものではない

位牌とは、死者の戒名（法名）を書く台のついた長方形の木牌である。これによって死者を象徴し、葬儀や供養が行われる。

● 仏教発祥の地・インドでは位牌の風習はない ●

仏教が中国に渡り、儒教の影響を受けたものである。儒教では、亡くなった人の生前の官位や姓名を記した板に、死者の霊が宿ると考えられた。

そのため、位牌を祀ったり、礼拝の対象としたものである。

また、宋の時代に「家礼」という冠婚葬祭を定めた書物が著され、死者葬祭が民間に広まった。その著書により、位牌が葬儀に用いられるようになった。

中国でできあがった葬儀の形式が、室町時代から江戸時代にかけて、禅宗によって持ち込まれ、一般民衆に広がった。

「位牌」には「故人の霊が宿る」と考えられており、故人の死者供養や先祖供養に用いられるものとして、仏壇に置かれるようになった。

● 仏壇はご本尊を祀り、位牌を祀るものではない ●

ところが、死者の生命は浄土に旅立つもので、位牌や仏壇に宿ることは成仏していないことになる。

ましてや仏壇は各宗派のご本尊を祀るもので、位牌を祀るものではない。

- ★ 仏教発祥の地のインドでは位牌（戒名を書いた木牌）はない
- ★ 中国で儒教の影響を受け、位牌を祀ったり、礼拝の対象とした
- ★ 位牌に「故人の霊が宿る」と考え、死者供養に用いるが間違い

位牌の種類

- ① 「白木の位牌」。通夜か葬儀のときに作った白木の位牌は、四十九日忌までは、中陰壇に祀ります。四十九日の忌明け後は、菩提寺に納めて、代わりに仏壇に祀る位牌（②または③）を準備し、それを仏壇に祀ります。
- ② 「繰り出し位牌」。先祖代々の位牌をまとめて収納できるタイプ。仏壇が小さく札板位牌ではいっばいになってしまうときに使います。
- ③ 「札板位牌（札位牌）」。故人一人に一つずつ作ります。黒塗り、金箔を施したものなど。形は蓮台つきや唐草模様彫りなどさまざまです。浄土真宗では位牌は作りません。死後、浄土に往生した者はすべて、阿弥陀仏と団体となって、再びこの世に還り、生きている人々を救おうとしているからです。わざわざ阿弥陀仏とは別に信仰の対象を作る必要はないので、位牌を作りません。

位牌の由来

仏教発祥の地のインドでは、位牌を作る風習はありません。

中国では、儒教の影響を受け、亡くなった人の生前の官位や姓名を記した板に、死者の霊が宿ると考えられました。そして、位牌が葬儀に用いられるようになりました。

日本には室町時代から江戸時代に持ち込まれました。「位牌」には「故人の霊が宿る」と考えられており、故人の死者供養や先祖供養に用いられるものとして、仏壇に置かれるようになりました。

仏壇に位牌は祀らない

死者の生命（霊）が位牌に宿るのは、浮遊霊となっていることであり、絶対にあってはならないことです。死者の生命はあの世（幽界またはA界）に進まねばなりません。また、仏壇は各宗派のご本尊をお祀りするものであり、位牌を祀るものではありません。

64 四十九日と年忌法要は続けますか？

● 四十九日や年忌法要の取扱い ●

初七日忌	葬儀に一区切りつける。葬儀の後に還骨回向と併せて付七日として営まれることが多い。
二七日忌 三七日忌 四七日忌	七日ごとの法要は、身内だけですませることが多い。
五七日忌	僧侶を呼んで法要を営む。命日から七七忌が3か月を超える場合には、五七忌で、忌明けとすることもある。このときは、忌明けの会食や引出物も用意する。
六七日忌	身内だけで済ませる。
七七日忌	満中院、尽中院ともいい、死者の生まれ変わりが決まる日とされている。原則として忌明けとなる。納骨法要も行う。
百ヵ日忌	故人が新仏となっではじめての法要である。盛大に行われていたが、最近では、身内ですますことが多くなった。
一周忌	死亡後まる1年目の祥月命日
三回忌	死亡後まる2年目の祥月命日
七回忌	死亡後まる6年目の祥月命日
十三回忌	死亡後まる12年目の祥月命日
十七回忌	死亡後まる16年目の祥月命日
二十三回忌	死亡後まる22年目の祥月命日
二十七回忌	死亡後まる26年目の祥月命日
三十三回忌	死亡後まる32年目の祥月命日
五十回忌	死亡後まる49年目の祥月命日

★民間信仰では、死者は死後七日ごとに、裁きを受けるとされる
 ★裁判の日に法要を行い、故人の罪を消して良い結果を得る
 ★そのため死後七日ごとに供養を行う習わしが今も続いている

初七日から四十九日まで

死後七日毎に供養をしますが次の2つは盛大に行い、他は家族だけで行えば良いでしょう。初七日忌は、葬儀のあとに還骨回向と併せて付七日として営まれることが多いです。

- ①五七日忌（三十五日）は、僧侶を呼んで法要を営みます。命日から四十九日が三か月にわたる場合には三十五日をもって忌明けとすることもあります。このときは四十九日と同様に盛大に法要を行い、忌明けの会食や引き出物の用意をします。
- ②七七日忌（四十九日）は満中陰ともいい、四十九日は死者の生まれ変わりが決まる重要な日とされています。原則的にはこの日をもって忌明けとなります。これまで、遺骨を自宅に安置してあった場合には、お墓に納骨する日でもあります。そのため納骨法要も行われ、四十九日の法要は僧侶を呼び、遺族、親族が一同に会して盛大に行うのがしきたりです。

年忌法要

年忌法要の定めは左の表のとおりです。一周忌の法要は盛大に、遺族、親族のほか故人と親しかった人々を招いて行いますが、それ以後は徐々に招待客を減らして、家族中心に行います。

故人の供養は普通は三十三回忌で弔い上げになります。戒名を過去帳に転記して、位牌を菩提寺に納めます。

供養はどうすればよいか

54項で述べたとおり、お釈迦様の教えは「供養は不要」なのです。参考としてインド仏教での法事は四十九日までで終わりです。中国仏教では儒教の影響で喪に服する期間が2年間とされ、法事は2年後の三回忌までで終わりです。日本仏教では三十三回忌までで終わりとなっています。

コラム6 先祖とつながって生きること

私たちがこの世を生きて行く上で、先祖とつながることはもっとも大切なことだといっても過言ではありません。

私たちは誰もが目に見えない「へその緒」によって先祖とつながりをもっているからです。先祖たちは子孫たちにただ幸せに生きてほしいと望み、そのための応援と手助けを惜しみません。

なぜならば、自分の子孫たちが幸せな人生を送り、良質な愛のエネルギーをあの世に送り出すことにより、先祖たちもうるおい、良い充実した世界をつくることのできるからです。

私が運が良い人生を送ってきたと思えるのは、母を通して、たくさん先祖たちとへその緒でつながっていたからでしょう。

しかし世の中にはこの見えないへその緒を自分で切ってしまう人がいます。自分の親を否定し、感謝することもなく、自分の成功はすべて自分の力だけでなしとげたと思っている人です。「俺は誰の力も借りていない。全部自分の実力で勝ち取ったんだ」そんなふうな傲慢な姿勢で生き、産んでくれた母親、育ててくれた親に感謝する気持ちを持たない人は、へその緒が切れてしまいます。

母親とのへその緒が切れるということは、そこから続く何千、何万の先祖とのラインがすべて切れるということです。すると「あの世」からの応援が全く受けられなくなります。そういう人はたまたま一時的に成功したり、いい思いをすることはあっても、どこかで大どんでん返しがあって不幸になると母はっています。

先祖とつながってさえすれば、先祖は自分たちの子孫を絶対不幸にはしません。いま、不幸せだったり、人生がうまくいっていない人は、先祖としっかりとしたつながりができていないか、「その道は間違っている」と先祖が教えているかのどちらかなのです。

出典：宮内淳著「あの世が教えてくれた人生の歩き方」サンマーク出版